研究ノート

H・海塞作／梅娘訳「奇妙的故事」および魯風訳「詩人」に関する覚書

栗山千香子

短編小説「詩人」について紹介し、翻訳に用いた底本について調査検討した結果を記しておきたい。また掲載誌『華文大阪毎日』の西洋文学紹介の状況とその意義についての初歩的な考察を試みたい。

1　はじめに

一九三〇年代後半から一九四〇年代はじめにかけて日本に留学し、帰国後は日本統治下の〝淪陥区〟北京で創作を続け人気を博した女性作家・梅娘[1]は、日本文学の翻訳も意欲的におこなった。その主な仕事に、久米正雄「白蘭の歌」、石川達三「母系家族」の翻訳がある[2]。また、あまり知られていないが、日本語訳からの重訳と思われる西洋文学の翻訳もある[3]。筆者は昨年、梅娘の日本での足跡と代表作である小説「蟹」についての論考をまとめたが[4]、「蟹」の初出雑誌『華文大阪毎日』を閲読する過程で、梅娘が同誌にH・海塞、すなわちヘルマン・ヘッセの短編小説を翻訳紹介していることを知った。

本稿では、その梅娘訳によるヘッセの短編小説「奇妙的故事」、および同誌の同じ号に掲載された魯風訳によるヘッセの

2　「奇妙的故事」および「詩人」の概要

短編小説「奇妙的故事（ふしぎな物語）」（梅娘訳）および「詩人」（魯風訳）は、一九四〇年八月十五日発行の『華文大阪毎日』第五巻第四期（通巻四十四号）に掲載された。同誌はこの年、「海外文学」選輯と称して西洋文学の特集を六回にわたって組んでおり、この号はその第二回にあたっている。ヘッセ特集であるこの回には、短編小説「奇妙的故事」「詩人」のほか、紅筆による作家紹介「詩人海塞底靈魂（詩人ヘッセの魂）」が掲載されている。なお、魯風は陳漪堃の筆名、紅筆は

柳龍光の筆名。二人とも同誌の編集者兼記者であり、柳龍光は梅娘の夫でもある。同誌の性格や特徴については次章で述べることとする。

「奇妙的故事」は中国語訳で三千四百字ほどの短編小説である。――茲古拉という名の男が日曜日に博物館へ行き、展示物の中にあった錬金術の丸薬をつい持ち去って飲んでしまう。そのあと動物園に行くと動物の言葉が理解できるようになっていて、動物たちの人間に対する侮蔑を知ることとなり、同時に動物たちの気高さに気づかされる。男は人間に絶望し、思考が混乱したまま歩き回り、ついにはステッキや帽子や靴やネクタイを投げ捨て、男を終始澄んだ瞳で見つめていたヘラジカの柵にとりついてむせび泣く。最後に男は精神病院へ送られてしまう。――社会から疎外された人間の孤独な姿、科学や文明への懐疑、皮肉な語り口などが、訳者（梅娘）や編集者の印象に残ったのではないだろうか。博物館や動物園という設定も、新鮮に感じられたかもしれない。

「詩人」は中国語訳で四千六百字ほどの短編小説である。――黄河のほとりに住む唐の青年詩人・范芳呉は、完璧な詩人になることを切望していた。ある日の夕方、燈籠流しの祭りがおこなわれた河のほとりで、完全な詩の言葉を口にする老人に出会う。范芳呉はすでに決まっていた結婚を先に延ばし、両親と許婚のいる故郷をあとにして、老人のもとで弟子として音楽と詩の修行を積む。どれほどかわからないくらいの年月が過ぎたある日、師匠の姿はいつのまにか消えており、范芳呉は琵琶を携えて故郷へ帰るが、両親も許婚も親類もすでに世を去っていた。その日の夕方、河で燈籠流しの祭りがおこなわれ、范芳呉が琵琶を弾くと、人々はみなうっとり聞き入った。范芳呉には、その日の祭りと、昔同じ場所で師匠の詩の言葉を耳にして衝撃を受けた日の祭りとの区別がつかなくなっていた。――ヘッセの中の真の詩人のイメージや、中国文化ことに老荘思想に対する憧れが表現された作品である。訳者（魯風）や編集者がこの作品に興味をもち、中国の読者に紹介したいと考えたのは自然なことだろう。

梅娘訳「奇妙的故事」と魯風訳「詩人」には、原作に関するデータの記載がない。最新の日本語版『ヘルマン・ヘッセ全集』（全十六巻、臨川書店）は、ドイツで刊行された最新版のヘッセ全集（全二十巻＋別巻、ズーアカンプ出版社）を底本としており、各作品の初出データ等も正確に翻訳記載されている。この日本語版全集に拠って原作の原題・初出等の確認を試みた。

「詩人」は日本語の表題も同じなのですぐにみつかったが、「奇妙的故事」は、日本語訳として予想できる「ふしぎな物語」「奇妙な出来事」などの表題はみあたらず、中国語訳の主人公の名前・茲古拉（Zigula）と日本語表題「ツィーグラーという名の男」が結びつくまでに、少し時間がかかった。「奇妙的故事」という中国語表題は、梅娘が翻訳の底本とした日本語版テキストの表題によることが後に判明したのだが、このことについては後述する。前述の臨川書店版・ヘッセ全集によれば、この二作品の原題と執筆・初出はつぎのとおり。

○原題　Ein Mensch mit Namen Ziegler（ツィーグラーという名の男）

執筆・初出　マールバッハのドイツ文芸資料館にタイプ原稿所蔵。初出は、雑誌《ジンプリチシムス》（ミュンヘン、一九〇八年十二月二十一日）。単行本としての初出は、H・ヘッセ『思い出帳』（ベルリン、一九三五年）

○原題　Der Dichter（詩人）

執筆・初出　一九一三年執筆。初出は『芸術への道』の表題で新聞《デア・タ―ク》（ベルリン、一九一三年四月二日）、単行本としての初出はH・ヘッセ『メールヒェン』（S・フィッシャー出版社、一九一九年）

H・海塞作／梅娘訳「奇妙的故事」および魯風訳「詩人」に関する覚書

3　中国語訳の底本について

梅娘訳「奇妙的故事」と魯風訳「詩人」には、翻訳に用いたテキストについての記載もない。梅娘も魯風も日本語が堪能だったこと、当時日本に滞在しており日本語の刊行物が入手しやすかったこと、日本で編集・発行され日本語の情報・文献からの翻訳が多かった掲載誌の状況等から、この作品は日本語訳からの重訳であると考えられる。

結論から言えば、梅娘と魯風が翻訳にあたって底本としたのは、改造社『ふるさと紀行　他六篇』に間違いないと思われる。そのように結論づけた理由を、刊行時期、表題、本文等の異同の三点から説明したい。

まず、二つの作品を収録している日本語版テキストを挙げておく。

1．改造社『ふるさと紀行　他六篇』（改造文庫）、一九三九年五月

※「ふるさと紀行」「奇妙な物語」「詩人」「ファルドゥム歳の市」「エミール・コルプ」「イーリス」「アウグストゥス」の七編を収録。竹越和夫訳。

2．三笠書房『ヘルマン・ヘッセ全集』全十八巻＋別巻、

一九三九年九月―四二年一月

※第十巻（一九四〇年八月）に『母に歸る』の中の一編として「詩人」を収録。尾崎喜八訳。

※第十八巻（一九四一年三月）に『知と愛の物語』の中の一編として「チーグラーといふ名の男」を収録。佐藤晃一訳。

3．新潮社『ヘルマンヘッセ全集』全十四巻＋別巻、一九五七年三月―五八年六月

※第十巻（一九五七年十二月）に『東方巡礼』の中の一編として「詩人」を収録。高橋健二訳。

4．臨川書店『ヘルマン・ヘッセ全集』全十六巻、二〇〇五年四月―〇七年一二月

※第六巻（二〇〇六年二月）に『物語集Ⅳ 1908-1911』の中の一編として「ツィーグラーという名の男」を収録。竹岡健一訳。

※第九巻（二〇〇五年六月）に『メールヒェン』の中の一編として「詩人」を収録、川端明子訳。

■刊行時期について

「奇妙的故事」「詩人」の掲載誌（『華文大阪毎日』第五巻第四期）の発行日（一九四〇年八月十五日）より前に刊行された日本語版テキストは、1だけである。2の第十巻は同じ一九四〇年八月に刊行されているが、翻訳・印刷の時間を考えると、これを底本とした可能性は低いだろう。また後述するように、2の内容には中国語訳と異なる点がある。

■「奇妙的故事」と日本語表題について

中国語表題と同義なのは1（「奇妙な物語」）のみである。1のあとがきには、「「奇妙な物語」は且つてのウキンナア・プレセに掲載された作品」とある。「ウキンナア・プレセ」は当時ウィーンで発行されていた新聞と思われるが、詳細はわからない。また1には原題についての記載はない。「奇妙な物語」という日本語表題は、訳者（竹越和夫）が独自に考えたものかもしれないが、「ウキンナア・プレセ」にそのような表題で掲載されていた可能性もある。

■「奇妙的故事」と日本語版本文の異同について

「奇妙的故事」と1の本文は、「奇妙的故事」に訳者（梅娘）の訳し漏れと思われる部分が1の日本語で二行強あるほかは、一致している。2、3、4には、つぎに示すように冒頭部分に比較的大きな違いがある。

「奇妙的故事」（梅娘訳）

在世間依舊包在和平的空氣的時候、在福勞耶爾的小巷

中、住着一位名茲古拉的年青的男人。

1の「奇妙な物語」（武越和夫訳）

まだ世間が平和な空氣に包まれてゐた頃、フラウエル横町に、ツイーグラーと云ふ若い男が住んでゐた。

2の「チーグラーといふ名の男」（佐藤晃一訳）

あるときブラウエル街にチーグラーといふ名の若紳士が住んでゐた。

4の「ツィーグラーという名の男」（竹岡健一訳）

かつてビール醸造小路に、ツィーグラーという名の若い紳士が住んでいた。

■「詩人」の詩人の名前とMathilde Schwarzenbach（スイスのチューリヒの裕福な工場経営者の娘で、長年ヘッセと親交を結んだ文通相手）への献辞について

「詩人」（魯風訳）の詩人の名前は「范芳呉」。献辞なし。

1の詩人の名前は「范芳呉」。献辞なし。

2の詩人の名前は「范鳳公」。本文の前に献辞「マティルデ・シュワルツェンバッハに」

3の詩人の名前は「ハン・フォーク」。献辞なし。

4の詩人の名前は「ハン・フォーク」。本文の後に献辞「マティルデ・シュヴァルツェンバハに捧ぐ」

H・海塞作／梅娘訳「奇妙的故事」および魯風訳「詩人」に関する覚書

以上から、刊行時期、表題、本文等の異同、いずれの点からも、1のみが中国語訳の二編の底本とみて矛盾がないことがわかる。梅娘訳「奇妙的故事」と魯風訳「詩人」の底本は、改造社版『ふるさと紀行　他六篇』であることは間違いないと思われる。

4　掲載誌『華文大阪毎日』および「海外文学」選輯について

「奇妙的故事」と「詩人」が掲載された『華文大阪毎日』は、一九三八年十一月一日に創刊された半月刊の中国語総合雑誌である。「満洲」を含む中国全土に販売網を持つこの雑誌は、発行部数の多さ、発行期間の長さ、執筆陣等、いずれの点でも、当時最も影響力を持った中国語雑誌のひとつであった。発行所は大阪毎日新聞社・東京日日新聞社。民間の雑誌ではあるが、政府の肝入りで発刊されており、当然のことながら「大東亜共栄圏」構想を中国人に宣伝・啓蒙しようとの意図がうかがえる。しかしまったくの国策宣伝雑誌というわけではなく、時局のほか教育、生活、科学、文学、芸術など幅広い分野の記事や論説や作品が掲載され、内容は多岐にわたっている。

ことに文学には比較的多くの紙面を割いており、日本の著名な作家および作品を紹介するほか、中国語による創作も多く掲

載している。懸賞を設けて論文・創作を募るなど、日本への留学生を含む新人作家発掘の役割も果たしていた。(5)

同誌には「海外文学」選輯が始まる前に「翻訳文芸」という蘭があったが、日本文学の翻訳紹介が主で、また作品もごく短いものに限られていた。「海外文学」選輯は西洋文学に的を絞った特集で、毎回四～六ページの紙面を割いて一人の作家を紹介している。作品の翻訳二、三篇と作家紹介の文章一篇（作家の写真つき）を掲載するという紙面構成が六回すべてに貫かれており、内容も比較的充実している。

「奇妙的故事」と「詩人」がこの「海外文学」選輯の第二回の中で翻訳紹介されたことはすでに述べたが、ここで全六回のラインナップをすべてあげておこう。

第一回　※A・紀徳特集

「A・紀徳和他的作品」雪螢／「芸術的界限」白樺訳／「一九一四大戦日記」魯風訳

（『華文大阪毎日』第五巻第二期（通巻四十二号）一九四〇年七月十五日）

第二回　※H・海塞特集

「詩人」魯風訳／「奇妙的故事」梅娘訳／「詩人海塞底霊魂」紅筆

（同第五巻第四期（通巻四十四号）一九四〇年八月十五日）

第三回　※J・倫敦特集

「白牙」張蕾訳（抄訳）／「地獄人群」魯風訳（抄訳）／『地獄人群』序」雪螢訳／「生活的探求—関於J・倫敦」紅筆

（同第五巻第六期（通巻四十六号）（一九四〇年九月十五日）

第四回　※M・Y・莱蒙托夫特集

「搭瑪尼」（「現代英雄」之一節）白樺訳／『抒情詩抄』糸己訳（「帆」「希望」「故国」）／「早死的莱蒙托夫」雪螢

（同第五巻第八期（通巻四十八号）一九四〇年十月十五日）

第五回　※拝倫特集

「拝倫的一生」梅娘／『Childe Harold 的巡礼』（抄訳）白樺訳

『抒情詩抄』白樺訳（「印度風格的歌（献給我的愛人）」「寄」「断片（二十三）」）

（同第五巻第十期（通巻五十号）一九四〇年十一月十五日）

第六回　※L・皮藍代羅特集

「L・皮藍代羅」魯風／「密友」蕭然訳／「最好再想一遍」劉針訳
（同第五巻第十二期（通巻五十二号）一九四〇年十二月十五日）

第一回はジイド（André Gide）、第二回はヘッセ（Hermann Hesse）、第三回はロンドン（Jack London）、第四回はレールモントフ（Mikhail Y. Lermontov）、第五回はバイロン（George Gordon Byron）、第六回はピランデッロ（Luigi Pirandello）の特集であり、フランス文学、ドイツ文学、アメリカ文学、ロシア文学、イギリス文学、イタリア文学、とバランスを考えた西洋文学紹介を意図していることがうかがえる。

この選輯における梅娘と魯風および柳龍光の仕事ぶりを見てみると、梅娘は第二回に小説の翻訳、第五回に作家紹介の文章を、魯風は第一回、第二回、第三回に小説の翻訳、第六回に作家紹介の文章を発表している。また、柳龍光は紅筆という筆名で第二回、第三回に作家紹介の文章を、糸己という筆名で第四回に詩の翻訳を発表している。執筆回数から見る限り、この「海外文学」選輯は、本誌の編集者兼記者であった魯風、柳龍光、そして白樺（田瑯）、雪螢（李景新）が中心になり、彼らと親しかった梅娘等が書き手として協力する形だったのではないだろうか。

5　おわりに

以上述べてきたように、一九四〇年に中国語に翻訳・発表されたヘッセの二編の短編小説「奇妙的故事」（梅娘訳）および「詩人」（魯風訳）は、その前年に日本で刊行された改造文庫から翻訳され、中国国内の読者に届けられたことは間違いないと思われる。当時このような形で西洋文学の翻訳紹介がおこなわれた意味は小さくないと考えるが、そのことを論じるためには、『華文大阪毎日』「海外文学」選輯全体の取り組み、さらに当時の中国語による外国文学紹介の状況全般についても把握する必要があるだろう。

今後さらに調査をすすめ、一九三〇年代から四〇年代にかけて日本に留学し、日本と中国を往来しながら「筆」で生きた彼らの翻訳という文学的営為とその意味を検証していきたいと思う。

注

（1）梅娘（Meiniang／本名は孫加瑞 Sun Jiarui）は、一九二〇年に長春で生まれ、一九三〇年代後半から四〇年

代はじめにかけて二度にわたり日本に留学、留学中に本格的な創作を開始した。しかし、小説「蟹」が大東亜文学賞を受賞して〝満洲国〟屈指の女流作家ともてはやされるなど、日本と深く関わったその経歴ゆえに、新中国建国後には右派分子とされ、一九七八年に名誉回復されるまで、その名は完全に封印されてしまった。一九八〇年代以降、中国で文学史の見直しが進められる中、梅娘とその作品についての研究もはじまっているが、その文学的営為や背景はまだ十分に明らかになったとは言えない。

（2）「白蘭の歌」は「白蘭之歌」として『大同報』に翻訳連載（一九三九年十一月二十八日から四一年一月二十三日）された。「母系家族」は同じ表題で『婦女雑誌』に翻訳連載（一九四二年十一月から四三年九月）された後、一九四五年に北京新民印書館から単行本で出版された。これらの翻訳について論じたものに、岸陽子「もうひとつの『白蘭の歌』―梅娘の翻訳をめぐって」（『植民地文化研究3』二〇〇四年）、張志晶「梅娘と『白蘭の歌』」（『東アジア比較文化研究7』二〇〇八年六月）、同「石川達三『母系家族』試論―比較文学的梅娘論の一階梯として」（『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』二〇〇二年九月）がある。

（3）范宇娟『梅娘著訳年表』（『新文学史料』二〇〇〇年第一期）によれば、一九四一年にシェリーの詩「歌」の翻訳が『中国文芸』第四巻第一期に発表されている（未見）。本稿で扱ったヘッセ作品の翻訳については、管見の限りまだ紹介されたものはなく、この年表にも記載がない。

（4）栗山千香子「梅娘（Meiniang）試論―小説『蟹』を中心に」（『現代中国文化の光芒』中央大学出版部、二〇一〇年三月）

（5）同誌の文学面での貢献については、岡田英樹「中国語による大東亜文化共栄圏―雑誌『華文大阪毎日』・『文友』の世界」（『中国東北文化研究の広場』第二号、二〇〇九年三月）に詳しい。

付記　ドイツ語版テキストやドイツ語表記について、ドイツ文学者であり『ヘルマン・ヘッセ』全集（臨川書店）の編集・翻訳を担当された田中裕氏と竹岡健一氏に質問し、丁寧な回答をいただいた。田中裕氏には、日本におけるヘッ

セ紹介について、また「詩人」の献辞の相手であるMathilde Schwarzenbachについてもご教示いただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

（くりやま　ちかこ・中央大学）